

受人印 1520030116B00159



野幌試験地閉庁記念しおり



02000-00122213-0

昭和47年5月

農林省林業試験場北海道支場

試
每道
2

野幌試験地の閉庁にあたり

野幌の林内に新道をつくる。

林内居住の青年たちが烈日のもとに
労働している。

あか土の山道やまみちつくる若人に

真夏のひるのこ焦げる陽は照る

大正12年7月

新 島 善 直

野幌試験地が設けられたのは昭和28年である。当時野幌にあった林業試験場が、農林省林業試験場北海道支場となって札幌市豊平に移転するにあたり、それまで試験場と密接不離の関係にあった附属試験林の管理上設置されたものである。庁舎は昭和5年設定の気象観測所があてられた。

職員は主任以下4名で、580haの試験林の維持管理、経営を目的として運営された。その対象となった野幌試験林の歴史の詳細については本冊子の“試験林ものがたり”をご覧願いたい。

ところが、このたび札幌市豊平所在の林業試験場北海道支場が、昭和47年から3カ年計画で札幌市羊ヶ丘に移転することが決まり、その敷地面積170haのうち約130haの森林を附属試験林として保有することとなった。この移転を機会に、組織上の野幌試験地は5月1日をもって廃止される。

実に野幌に試験場と試験林が設けられてから64年、野幌試験地となってからでも19年が経過したわけである。もちろん時代の要請と研究の推移進展にもとづく発展的閉庁ではあるが一沫の寂しさを禁じ得ない。

ここに改めて、明治41年以来の先人の苦労と輝かしい業績を偲び、かつ関係各位の多大のご支援に対し心からのお礼を申し上げる。そして野幌試験地の業務を閉じることのお知らせと試験林の歩みを数葉の写真とともにしるし、記念の小冊子とした。

いささかでも感謝の微意をおくみとり願い、思い出のよすがともなれば幸いである。
野幌森林の今後の発展を祈念しつつ……。

昭和47年5月1日

農林省林業試験場北海道支場長

余 語 昌 資

目 次

野幌試験地の閉庁にあたり	
試験地の沿革	1
閉庁時の概要	2
試験林ものがたり	3
付 表	
内務省所管北海道林業試験場職員名簿	12

試験地の沿革

明治 41 年 6 月 当時の江別村字志文別に内務省所管林業試験場が創設された。附属試験林 3,426 ha をもち、その森林の育成、経営を中心として試験が進められた。

昭和 8 年 1 月 北海道林業試験場と改称された。

昭和 11 年 4 月 時代の推移に伴い木材利用、林産化学、治水、混牧林など、新しい分野の諸試験が拡充された。

太平洋戦争中 木材の供出、食精増産、農地転換などのため、試験林は 1,163 ha に圧縮された。

昭和 22 年 5 月 林政統一により、北海道林業試験場は別途昭和 14 年札幌市に開設された帝室林野局の林業試験場と統合され、農林省林業試験場札幌支場と改称された。札幌支場を野幌におき、札幌市に分室がおかれた。

昭和 26 年 7 月 札幌市に支場がおかれ、野幌は分室となった。

昭和 28 年 10 月 (野幌試験地のはじまり) 野幌の試験設備のすべてが札幌に統合され、林業試験場北海道支場となり、札幌市豊平の現在地に移転し、北海道全域の育成林業の試験を対象とすることとなり、野幌試験林は 580 ha に縮少された。そして野幌試験地がおかげ、試験林の維持経営などにあたることとなった。

昭和 29 年 9 月 台風 15 号により試験林は多大の被害を受け面積も 291 ha と大幅に減少した。

昭和 35 年 3 月 北海道林木育種場用地として約 82 ha を移管し、試験林面積は 209 ha となった。

昭和 44 年 10 月 野幌国有林の大部分が道立森林公園および林野庁の自然休養林に指定された。

昭和 47 年 3 月 試験計画の変更にもとづき、試験林を約 70 ha に縮少した。

昭和 47 年 5 月 (野幌試験地の廃止) 林業試験場北海道支場が札幌市豊平から札幌市羊ヶ丘へ新築移転することが決まり、同時に野幌試験地を廃止することとなった。

閉 庁 時 の 概 要

○組 織 農林省林業試験場
北海道支場
野幌試験地（江別市西野幌）

○職 員 試験地主任 長内力（兼）
山上鶴松（兼）
金安利喜松

○施 設 敷 地 庁舎敷 661 m²
露 場 246 m² (42年取得)
庁舎 153 m²

歴代試験地主任 山上鶴松（昭和28年～昭和42年）
長内力（昭和42年～昭和47年）

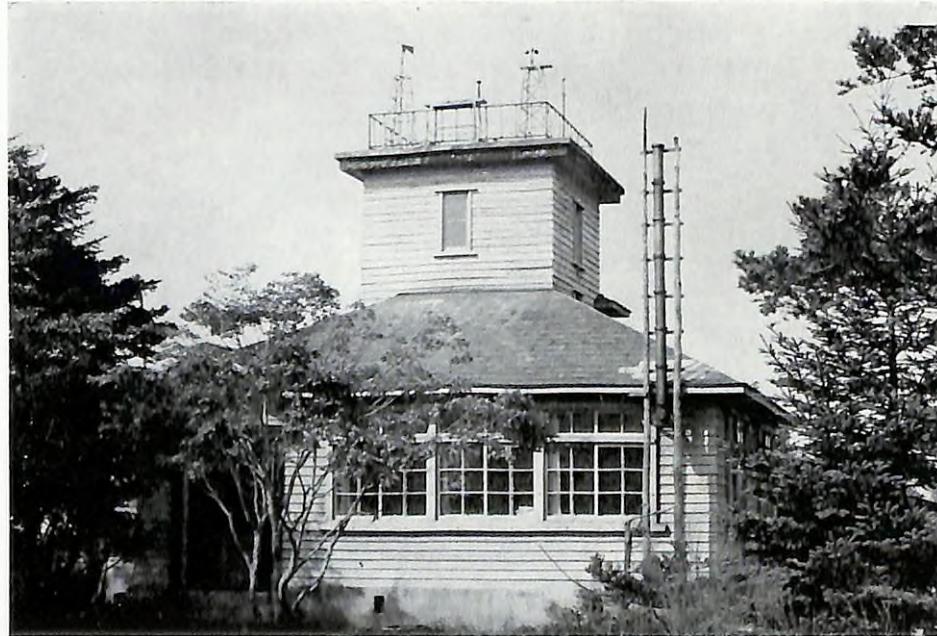


写真-1 野幌試験地 庁舎

— 2 —

試験林ものがたり

§ 開 庁

明治41年6月1日、札幌郡江別村字野幌国有林内に林業試験場が開庁された。いまの江別市字志文別、札幌営林署の野幌苗畑事務所の近くで、52坪（約172m²）の事務所に小使室（別棟）、物置、倉庫など一切を含めた附属設備224坪（約739m²）、計276坪（約911m²）が試験場の建物のすべてであった [写真-2]。

建築費は一切を含めて7,852円65銭4厘。そのころの物価は米1升が一等米18銭、三等米15銭、清酒1升が50銭、日給は高い方で50銭であった。50銭あれば、東京では牛込から電車（往復9銭）で浅草に行き、映画（13～15銭）を見て、うまい物を食べ、ゆっくり遊んで帰れた時代であったから（山井基福氏談）、7,852円というカネは、大ざっぱに換算して今日の1,200万円位にも当たる。とにかく高い建築費であった。

庁舎の位置は、野幌駅から6km、厚別駅から8km、電灯はない、電話はもちろんない。途中はうっそうとした原始林で、わずかに駅から馬車道が一本通っているだけであった。創業の労苦、まことに察するに余りがある。

庁舎をとりまく森林は、冒頭に述べたように単に野幌国有林と言っていたが、昔ながらの原生林で、文字通り「昼なお暗く」、土地不案内な者なら、一人で歩けないような状態であった。この様子はいち早く試験林を訪ねた人が、明治42年の北海道林業会報に報告しているが、現在の野



写真-2 創立当時の試験場

— 3 —

幌からは、とうてい想像されない林相であった。

§ 試 験 林

この広大な林が、明治41年11月林業試験場の附属実験林となった。面積3,426町、いまの江別市厚別町および広島町にまたがっている[第1図]。試験林といつても、ただ試験に使っていたわけでもない。木を伐り、造材し、これを販売する。もちろん林の監守を絶やさないで、風倒や虫害などがあれば、その都度処置をするという具合で、現在の国有林の実験営林署が、60年前に作られたわけである。

これだけの規模の森林の維持・管理に加えて、本来の仕事である試験研究が何人の職員でまかなければならなかったかというと、これまたアッと驚くことになる。すなわち場長の他、職員3名、定夫5名、計9名というのが、創設当時の試験場の総員であった。

§ 林 業 試 験

北海道の原生林は、明治の後半からひどい濫伐をうけるようになったが、それでもまだ土地が広く、人口が稀薄で、開拓というさせました仕事にとっては、却って森林が邪魔になるということもある。一般には森林の将来が心配されることもなく、まして森林と林業に関する試験・研究などは、特定の人々の間でしか問題にされなかった。こういう時期に、いち早く林業試験場を作った明治の政府は、やはりエライ、氣宇壯大である。「研究の先どり」など、足元にもおよばない。しかし一方、試験を行なう方は大変で、何一つ取り上げてもわからないことばかりである。試験計画を立てるのにずいぶんと苦労があったろうと思われるが、とにかく大変立派な計画を立て、これを少人数で着々と実行していったことは、むしろ驚きである。

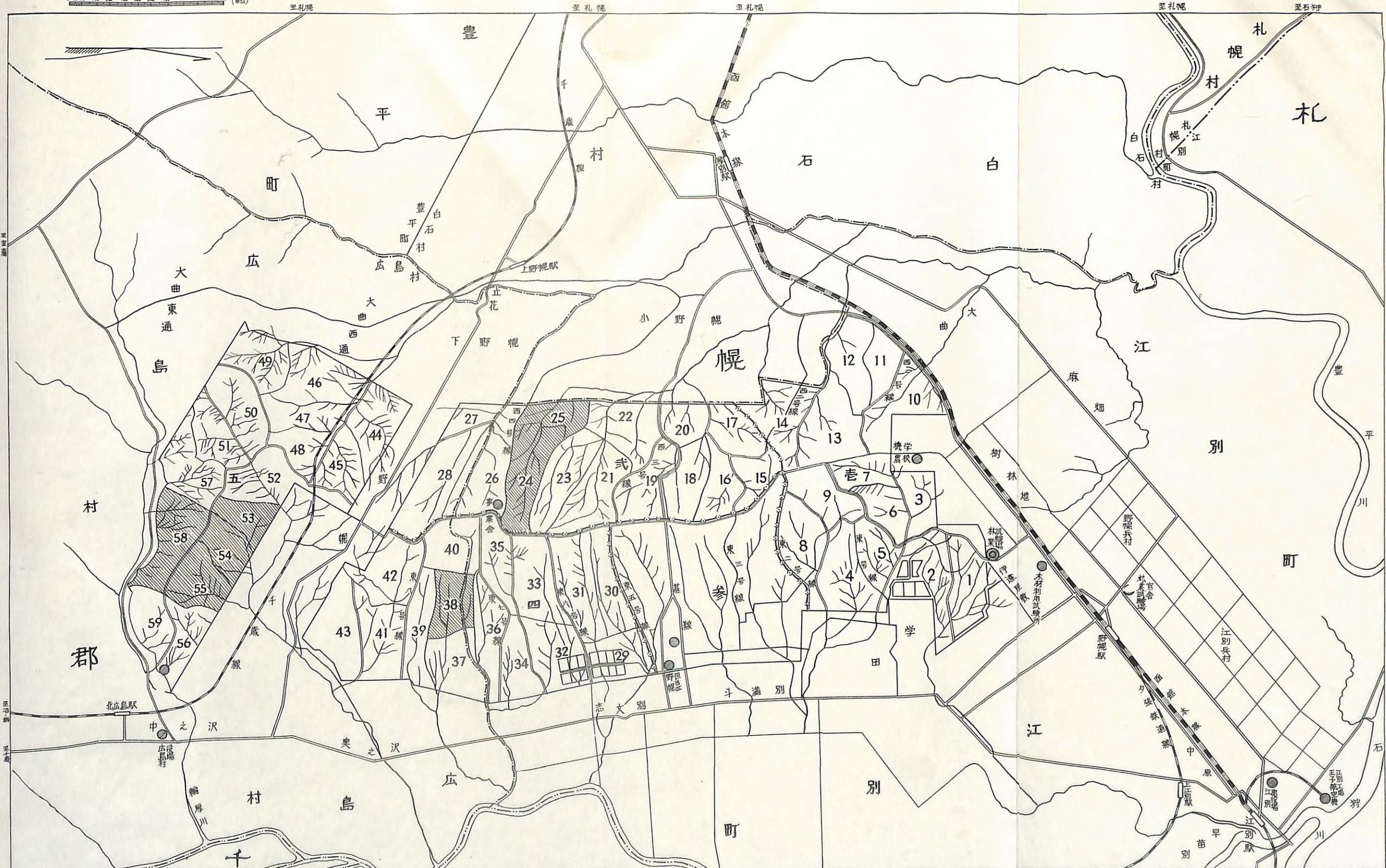
ここでは試験項目だけを列記するに止どめる(原文のまま)。

1. 固定苗圃試験 播種試験
床替試験
挿条試験
2. 林内苗圃試験 林間苗圃試験
樹下苗圃試験
3. 人工造林試験 土地湿度試験
植栽季節試験
混交植栽試験
4. 天然更新試験 予備伐試験
下種伐試験
後伐試験
林地手入試験

第1図 野幌国有林森林図 (大正初期)

縮尺五万分之一

0 50 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000 (単位)



5. 製炭試験
- { 煙内各部位置試験
黒炭窯大小比較試験
樹種試験
炭材乾燥量調査試験
6. 椎茸培養試験
- { 梢木採取時期比較試験
寝込方法試験
寝込位置試験
人工播種試験
7. 斫伐度比較試験
8. 間伐試験

§ 試験場を支えた人々

試験場の業務を手落ちなく推し進めることは職員だけでは、とうてい出来ないことであった。

始めに述べたように試験場の仕事は試験研究だけでなく、今の営林署と同じような性格をも持っていたから、山火警防はもとより、伐木・造材・運材および林道作設のような荒々しい仕事から、種子選別、高さ1cm位の稚苗調査のような細かい仕事まで、それこそ山のようになつた。職員にしても、当初の10人足らずの人間では進展する試験に追いつかなかつたが、定員の増加は現代と同様に歴しかつたらしい。こころみに、古い履歴簿から着任順に職員を列挙してみると、付表のようになる。(12 p. 参照)。

当時、職種は、場長・技師・技手・属・雇・定夫・事業手等に分かれていた。採用の時、本官(技手・属などの判任官)と雇傭人とは、大体最初からハッキリしていたが、あとで雇傭人から昇格する者もあつた。また技手は数年で技師になることが普通だったので、付表に示されている区分はあくまで任用時点のものである。

この表によつて明治41年から大正15年までの職員の増減を見ると、次のようになる。(不明は退任年が明らかでない者)

年	着任数 (名)	退任数 (名)	不明 (名)	年	着任数 (名)	退任数 (名)	不明 (名)
明治 41年	11	0	1	大正 7年	1	2	1
42	8	3	1	8	4	5	2
43	7	9	1	9	2	3	0
44	1	2	0	10	3	2	1
45	1	1	0	11	9	2	1
大正 元年	1	0	0	12	2	1	0
2	1	3	0	13	2	4	1
3	1	2	0	14	3	1	1
4	2	0	0	15	1	0	1
5	1	2	0				
6	4	0	0	計	65	42	11

すなわち、この18年間に、着任65名に対して退任42名、差し引き23名ふえたように見えるが、着任時期だけしか分からぬ者が11名もいる。この11名が全部、大正15年まで在任したとは思われないので、職員数は創業時に比べても、ほとんど増加しなかったのではないかと推測されるのである。

定員がふえないとなれば、その次は作業員を確保し、拡充することが最も重要となってくることも、現代とそっくりである。かくして創設以来、人手の不足にはもっぱら必要な都度、人夫を雇うことでの急場をしのいできた。しかし、大正7、8年の歐州戦争を契機として、国内に一時的に好景気がおとずれ、人夫賃が高騰して恒常に林業労務者を確保することが困難となってきたので、林内移民の制度を採用することが最善と考えられた。

林内移民は、大正10年と昭和2年の2回に分けて行なわれたが、今日の試験林あるは、全くこれらの方々の努力のたまものである。ここに特記して感謝の意を表したいと思う。

大正10年

●篠原鷹一	●山上六太	斎藤孝平	●高野猪造
高橋雷全	●金安利津七	●斎藤佐一郎	●土田佐二郎
●細川重次郎	●池倉忠作	●新井新吉	●横山直治
●横山力造			

昭和2年

穴沢千代吉	●小野久一	西村菊次郎	●五十嵐小文治
小林金治			

(●印は故人)



写真-3 試験林部落における山の神のお祭り

試験場に協力してくれた人々は、林内移民だけではない。後のことであるが、森林愛護組合が結成されて、多くの人が試験林を守ってくれたのである。

職員はもちろん、林内移民および試験林で生活の糧を得る労務者など、3,426町の試験林に囲まれ生活していたいわゆる試験場部落の人々は、皆家族のような連帯感を持ち、特に年1回の試験場主催の山の神のお祭りには、近隣からも人が集って、実に盛大であった [写真-3]。

昭和2年、試験場は志文別から西野幌（現在の北海道林木育種場）に移転した [写真-4]。これは、試験場の歴史のうち、画期的な出来事の第一である。本庁舎だけでも約420坪（1,390m²）となり、試験のための係もふえた。しかし、付表にも見られるように、この頃から退任時期の不明な職員数が多くなってくる。特に、昭和11年、木材利用関係の研究部が併設され、さらに昭和16年以後、軍事用の研究（松精油・松根油・エンジン用木炭など）が始められるに及んでは、全然といってよい程、退任時期が分からぬ。

§ その後の試験地

昭和5年、新庁舎完成にしおくれて附属の気象観測所も作られた。爾来昭和44年まで42年間に亘って、同地点の気象（気温・風速・風向・降水量）を報告し続けた [写真-1]。

昭和11年秋、北海道で陸軍特別大演習が行なわれた際、画期的出来事の第二として、大沢に天皇の行在所が置かれた。この時も、部落一同打って一丸となり働いた。現在の標本館の資料は、この頃にほとんど整備されたものである。

このあとは、周知のように戦時体制となり、試験林はあちこちで軍用材として皆伐され、跡地に馬鈴薯が植えられた。一方では、松の葉から松精油、その根から松根油を採取する試験が軍命令

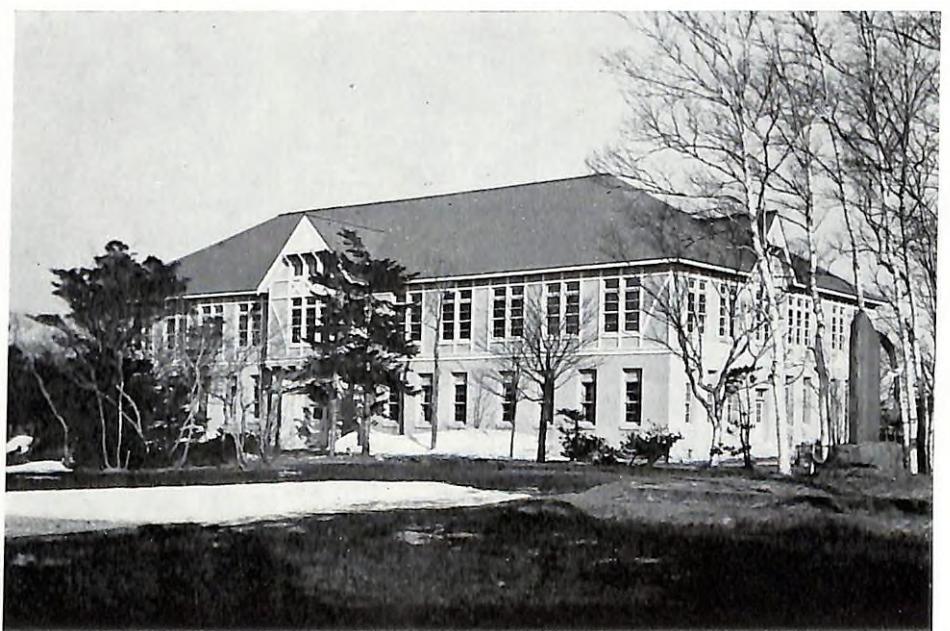


写真-4 昭和2年の試験場

として課せられた。——そして敗戦。程なく昭和22年林政統一が行なわれ、すでに札幌にあった帝室林野局の試験場と合併して林野庁に所属することになり、主体は札幌に、札幌支場としておかれ、野幌の方は分室と呼ばれることになった。これが、画期的出来事の第三であり、内務省所管の北海道林業試験場は、この時をもってその歴史の幕をとじたのである。

話はすこし横道にそれるが、戦後処理の第1番の仕事は行政整理であった。昭和20年10月30日、その案の骨子は次のように発表された。「内閣および各省は、おおむね昭和7年度当初予算における勅任官、奏任官、および判任官の予算定員以下にその人員を縮減することとし、縮減の目途を昭和20年度実行予算定員の5割におくこと」。役所の組織も当然縮少されるわけで、営林区署について言えば、当時道内にあった30の営林区署が、昭和7年度の19にもどされることになる。

行政整理の目標時期は「昭和21年3月末」で整理の具体的基準は、11月17日の毎日新聞によれば「1) 女子の退陣を出来るだけ要請すること。2) 官吏としての適格性に重要をおき、成績不良の官吏を対象とすること。」……と定められた。

北海道の林政が実際にこの方針通り行なわれたかどうかは知らないが、付表の名簿のうち、戦争だけなわの頃に着任された多くの女子職員が、殆んど退任時期不明となっているのは、おそらく此の戦後処理の犠牲になつたのであろうかと想像されるのである。

昭和28年、全施設が札幌に移転して、林業試験場北海道支場となり、野幌には気象観測所を残すだけとなって、野幌試験地と呼ばれ、試験林の維持・管理の唯一の拠点として活躍した。一方、試験林の方も敗戦後から数次にわたって、農地開放が行なわれたほか、昭和29年の15号台風などのために縮少の一途をたどり、現在試験林としては、わずか70haを残すのみとなった。

昭和47年、林業試験場北海道支場は、札幌市羊ヶ丘に移転することが決定し、この5月1日をもって組織上の野幌試験地が廃止される。思えば明治41年以来、人跡未踏の地に林業試験が開始されてから満64年を経たことになる。当時ここに勤いた人々も、すでに二代または三代目が当主となっているが、先人が嘗々として築き上げた試験林は、その生き証人としてそびえており(写真5および6)、この間、発表された620余編の論文^{註)}にゆるぎない基礎を与えてるのである。

(試験地主任 長内 力)

註) 明治41年から昭和46年までに発表された論文のうち、当時の試験場関係のものは次の通りである。

北海道林業試験場報告	No. 1~16, 19~20	54篇
北海道林業試験場時報	No. 1~54, 65~72	94 "
林業試験場北海道支場業務報告特別報告	No. 1~8	138 "
林業試験場北海道支場年報	1956~1970	169 "
林業試験場札幌支場研究発表会講演集	昭和24, 27年度	43 "
北海道林業試験場野幌国有林植物調査書	1 (1934: 2版)	1 "
北海道林業試験場野幌国有林内の動物調査書	1 (1936: 2版)	1 "
北海道野鼠被害調査報告	1938~1942	15 "
北海道森林病虫害報告	No. 1~10	10 "
林業試験場札幌支場北海道森林治水気象年報	No. 1~15	15 "
林業試験場研究報告	No. 46~243	82 "
		計	622篇



写真-5 明治42年のストローブマツ造林地



写真-6 上の造林地の現在の姿

一付表一

内務省所管 北海道林業試験場職員名簿

(明治41年～昭和21年)

※ 上川・釧路両試験地職員を除く

着任年	氏名	職種	退任年	着任年	氏名	職種	退任年
明治41年	斎藤 音作	場長	明治42年	大正6年	服部 正相	技手	大正8年
"	浅野 宇三郎	事業手	"	"	長岡 福太郎	森林監守	13
"	葛西 貫一	"	"	"	滝沢 喜平	定夫	昭和20年
"	小泉 升平	技手兼属	43	7	福重 紀隆	技手	不 明
"	牧 元吉	定夫	"	8	永根 信雄	技師	大正10年
"	島野 文平	"	"	"	庄司 弥造	技手	"
"	島野 千代蔵	"	"	"	伊賀上 賴一	雇	不 明
"	松山 智衛	事業手	"	"	高野 伝作	定夫	"
"	佐藤 仙太郎	技手	大正8年	"	吉田 横太郎	定傭夫	"
"	奥出 芳吉	定夫	"	"	吉田 アキ	"	"
"	大田 久次郎	"	不 明	9	外山 虎之助	"	大正9年
42	石川 政次郎	技手	明治43年	"	伊藤 勝次郎	"	"
"	加賀美 彦道	"	"	"	長池 幸雄	森林主事	昭和10年
"	神山 広	"	"	10	若松 貞二	技手	"
"	保科 宮城	場長	44	"	長谷部 半一	技師	昭和3年
"	阿部 仙次	定夫	大正3年	"	近藤 錄三郎	技手	不 明
"	西村 策治	"	8	"	高氏 弥作	技手	"
"	山上 六太	"	昭和3年	"	高橋 新民	技手	"
"	松田 次郎	属	不 明	"	海老名 弾夫	"	"
43	松川 洋三	定夫	大正5年	"	山口 千之助	"	14
"	加藤 理三郎	"	明治44年	"	広田 実	"	昭和4年
"	秋山 四郎	技手	45	"	平沢 和三郎	"	9
"	柳内 耕三	技手兼属	大正2年	"	篠原 弥太郎	定夫	20
"	中条 喜三郎	雇	3	"	篠原 鷹一	"	28
"	長寅 蔵	定夫	5	"	篠原 馨	定傭夫	不 明
"	小笠原 静藏	事業手	不 明	12	西谷 五一	"	大正13年
44	有田 正成	場長	大正2年	"	斎藤 佐代美	定夫	昭和46年
45	新島 善直	"	昭和9年	13	林 行五	技手	9
大正元年	松本 雲次	森林監守	大正2年	"	田中 案山子	"	不 明
2	都築 熊之助	定夫	不 明	14	紀藤 海三	"	昭和3年
3	鈴木 幸次郎	小使	大正5年	"	紙谷 勝次	雇	7
4	市川 信義	雇	7	"	宗本 正一	森林主事	不 明
"	小野 起	技手	11	15	今野 善次郎	技手	"
5	渡辺 政吉	定夫	7	昭和2年	小林 金治	定傭夫	昭和15年

着任年	氏名	職種	退任年	着任年	氏名	職種	退任年
昭和2年	西村 菊次郎	定傭夫	昭和16年	昭和11年	宇佐美 卜キ	試験副手	不明
"	山上 鶴松	"	一	"	北村 庄一	定傭夫	"
3	松江 賢修	技手	昭和10年	"	坂東 美智子	"	"
"	横山 次郎	森林主事	不 明	"	松井 忠男	定夫	"
"	等々力 栄	技手	"	"	中島 豊	"	"
4	原田 泰	技師	昭和13年	"	高橋 穎一	"	"
"	内田 丈夫	技手	41	"	平井 信二	雇	"
"	新妻 五郎	"	13	12	近藤 光子	定傭夫	昭和12年
"	金安 利喜松	定傭夫	一	"	島田 已代治	"	13
5	日暮 邦雄	試験助手	昭和9年	"	浅田 善治	試験副手	25
"	雨宮 正三	技手	不 明	"	新井 吉五郎	定傭夫	27
"	石崎 厚美	雇	"	"	丸山 敏	試験副手	29
6	大山 直也	試験助手	昭和23年	"	菊田 信吾	定傭夫	47
"	金井 角治	定夫	28	"	黒沢 滌	技師	不 明
"	西山 幸治	定傭夫	41	"	益満 政一郎	技手	"
7	丸山 光矣	試験助手	46	"	伊藤 浅治	"	"
"	横山 長蔵	定傭夫	一	"	松川 篤治	"	"
"	西山 与市	森林主事	不 明	"	高橋 一郎	定傭夫	"
"	神尾 敏	試験助手	"	"	根本 孝三	試験助手	"
"	宮井 海平	雇	"	"	五十嵐 錦	"	"
"	村井 延雄	"	"	"	菊池 久男	試験副手	"
"	高氏 弥作	"	"	"	山本 彦五郎	"	"
8	林 常夫	場長事務取扱	昭和9年	"	野村 正夫	"	"
"	高橋 健三	試験助手	13	"	渡辺 求馬	属	"
"	石原 供三	場長	15	"	堀田 正次	雇	"
"	倉橋 浩	試験助手	19	13	道岡 深海	"	昭和16年
"	照井 正夫	林業助手	20	"	坪松 虎雄	"	20
"	井上 元則	技手	昭和37年	"	土田 佐次郎	試験助手	28
9	鶴見 四郎	雇	23	"	阿部 富士夫	技師	不 明
"	小倉 武夫	"	16	"	細 太郎	技手	"
10	坪松 虎雄	"	20	"	長谷川 重美	属	"
"	松井 善喜	"	43	"	佐藤 正千代	雇	"
"	星井 熊吉	技手	不 明	"	小川 常雄	試験副手	"
"	細川 実	定傭夫	一	"	滝沢 シズエ	"	"
11	中川 道夫	試験副手	昭和13年	14	笛谷 万太郎	定傭夫	昭和23年
"	北村 義重	技師	21	"	宮野 力	試験副手	27
"	高田 岩次	定傭夫	41	"	篠原 均	定傭夫	28
"	長谷部 直治	森林主事	不 明	"	篠原 久夫	"	—
"	太田 静夫	試験助手	"	"	白井 信一	技手	不 明

着任年	氏名	職種	退任年	着任年	氏名	職種	退任年
昭和14年	満久 崇磨	技手	不 明	昭和16年	及川 けい子	試験副手	不 明
14	海野 幸雄	属	"	"	小西 智恵子	"	"
"	鳥谷部 芳枝	試験助手	"	"	西山 宜子	"	"
"	金内 喜恵子	試験副手	"	"	桐生 寅吉	"	昭和41年
"	沢田 昌子	"	"	"	真鍋 忠久	定傭夫	—
"	前川 与三松	"	"	"	石本 トシ	試験副手	不 明
15	和田 ミエ子	"	昭和21年	17	佐藤 昭市	定 傭夫	昭和18年
"	平佐 秀雄	"	22	"	高橋 敏勝	定傭夫	24
"	中野 実	技 手	—	"	斎藤 石藏	定 傭夫	28
"	大槻 実	試験助手	昭和25年	"	加納 孟	技 手	—
"	横山 喜作	定傭夫	—	"	五十嵐 文吉	定 傭夫	—
"	矢野 孝	"	—	"	田宮 芳夫	技 手	不 明
"	寿原 賢司	雇	不 明	"	前田 正寛	"	"
"	館山 一郎	"	"	"	金内 喜代江	試験助手	"
"	北村 誉猪	技 手	"	"	京兼 ハツエ	試験副手	"
"	小林 康秀	"	"	"	渡辺 恵美子	"	"
"	五十嵐 小文治	定 傭夫	"	"	小橋 芙優	"	"
"	谷江 浩知	"	"	18	阿部 美恵子	"	昭和23年
"	石川 良江	試験副手	"	"	大森 ツル	營林手	25
"	西村 サダ	"	"	"	池倉 忠作	定 傭夫	26
"	藤原 静子	"	"	"	沼尾 貞治	技 手	不 明
"	藤根 政子	"	"	"	及川 博	雇	"
"	鈴木 正勝	小 使	"	"	谷津 良子	定傭夫	"
16	西川 要八	試験助手	昭和25年	"	白川 末子	"	"
"	打田 イツ	試験副手	30	"	阿部 悟	試験助手	"
"	渡辺 清四郎	"	36	"	中西 正恭	"	"
"	毛利 勝四郎	定傭夫	—	"	金田 幸	試験副手	"
"	穴沢 博	"	—	"	今井 ミチ子	"	"
"	先名 福四	森林主事	不 明	"	斎藤 錠	"	"
"	羽田 弘	技 手	"	"	金子 麗	"	"
"	高橋 藤八	"	"	"	岡沼 千代子	"	"
"	加藤 実	定傭夫	"	19	加藤 悅二郎	技 手	昭和23年
"	小野寺 義夫	雇	"	"	相馬 テル	定傭夫	"
"	宮岸 良昭	給 仕	"	"	宇佐美 博	試験助手	"
"	加藤 幸子	試験副手	"	"	神 和 雄	技 手	25
"	関根 ミツエ	"	"	"	穴沢 忠	定傭夫	"
"	小成 節子	"	"	"	菊地 武雄	林業手	不 明
"	田尻 智江	"	"	"	小山 美津代	試験副手	"
"	高橋 ミチノ	"	"	"	末田 みち	"	"

着任年	氏名	職種	退任年	着任年	氏名	職種	退任年				
昭和19年	八幡 節子	試験副手	不 明	昭和21年	本 玲子	營林手	昭和25年				
20	守谷 善之	雇	"	"	倉田 紗子	"	"				
"	加藤 文江	試験副手	"	"	前田 節子	"	"				
"	佐々木 美恵子	"	"	"	榎原 彰	嘱託	24				
"	清水 陽	雇	"	"	長原 芳雄	定傭夫	25				
"	小泉 力	林業練習生	—	"	菊田 竹次郎	"	"				
"	佐々木 富士夫	營林手	不 明	"	荒又 宏	試験助手	"				
"	繁沢 静夫	"	昭和24年	"	田中 弘	"	"				
"	吉田 横太郎	"	不 明	"	岡沼 チエ	定傭夫	36				
"	吉田 アキ	定傭夫	"	"	小野 州一	試験助手	不 明				
"	佐々木 順平	雇	昭和30年	"	遠藤 克昭	營林工手	—				
"	小島 升一	"	不 明	"	鈴木 孝雄	定傭夫	—				
"	木下 芳雄	技 手	"	"	伊藤 辰弥	營林工手	昭和44年				
"	小田島 郁代	試験副手	"	"	平佐 忠雄	定傭夫	45				
"	高橋 峯藏	營林工手	—	×							
"	山本 肇	雇	—	×							
"	吉田 武	定傭夫	—	×							
"	横山 俊賢	属	昭和41年	×							
"	鍊田 丑之助	營林工手	43	×							
21	三島 憲	技 手	昭和27年	×							
"	広田 実	技 師	不 明	×							
"	福田 雅雄	定傭夫	"	×							
"	伊藤 重雄	技 手	昭和23年	×							
一備考一											
1. 明治41年から昭和21年までの在職者を記載した。											
2. 最初から、上川および釧路両試験地に勤務していた職員は省略した。											
3. この他、下記の方々が勤務していたが、履歴書不明のため、名簿には載せられなかった。											
4. なお、この他に記載もれの方をおられるかと思いますが、ご容赦願います。											
記											
宮本 虎勝 (昭和9年頃在職)											
五十嵐 末作 (" 12 ")											
山村 富士雄 (" 15 ")											
五十嵐 潔 (" 15 ")											
横山 二郎 (" 15 ")											
山之内 升 (" 16 ")											
紺屋 泰三 (" 18 ")											
川村 寅雄 (" 20 ")											

昭和47年5月15日 印刷

昭和47年5月20日 発行

野幌試験地閉庁記念しおり

編集兼発行 農林省林業試験場北海道支場
札幌市豊平区豊平5条13丁目

印刷所 合名会社 文栄堂印刷所
札幌市中央区北3条東7丁目
Tel. (代表) 231-5560



R
X
6
209

R
26
50



1
北
1